

## 特集にあたって

第 19 期第 19 研究会代表者

上 田 雅 弘

### 経済制度と社会秩序の形成に関する理論実証分析

本研究は、経済制度や社会秩序が規範・慣習などどのような関わりを持ちながら形成されるのか、またそれらがいかなる要因で変化していくのか、その生成や変容・崩壊の動的プロセスを解明することを目的としている。その分析手法は理論的、実証的なアプローチにとどまらず、歴史的、思想的な背景も含めた多面的な捉え方をしている。

ここでは「制度」を単に明文化された法律や規則と捉えるのではなく、社会を構成する個人あるいは企業が、他者と協同・協業したり対立したりする中で蓄積されたノウハウも含めた広義の意味として捉えている。つまり「制度」は経済社会システムそのものにとどまらず、秩序、慣習、規範、倫理など、人々が暗黙裡のうちに共有している仕組みやルールも含めて広く捉えることになる。

そもそも社会は契約の連鎖によって成り立っている。例えば、企業内に着目すると、従業員と経営者の間には明示的な雇用契約があり、経営者と株主の間には明示的な権限委譲契約が存在する。また、上司と部下の間には業務遂行に関する暗黙的な契約がある。他方で企業外には、他企業や地方公共団体との間に明示的な契約が結ばれ、取引先や周辺住民との間に黙示的な契約が存在することが多い。これらの契約方法を規定するのが社会制度である。

社会制度はその構成員の厚生を高めるために構築されるが、いったん構築されると、それを前提として各構成員が利己的に行動するため、必ずしも制度の意図が実現するとは限らない。そこで、制度の改革が行われることになるが、その際にも構成員の利己的な行動のために、改革が当初の目的を達成するものにならないのが実情である。つまり、制度改革により一時的に社会は望ましい姿に近づくが、その効果は持続せず、非効率な制度改革を繰り返すことになる。

これまでの制度改革における根本的な問題点は、「社会制度がどのように発展するのか」という基本的視座の欠如にある。多様な社会制度・秩序の発展過程に関する理論を

デルを提示し、それを実証的・実験的に検証する必要がある。多様な経済社会を生み出す要因はそれぞれの「制度」の形成にあり、過去から現在に至るまでの歴史的な経緯の中で生成された規範や慣習に大きく依存している。本研究では、このような意味での「制度」が個人や企業に行動をいかに規定するか、またその行為がいかに「制度」を維持し、「秩序」を生成しているかという問題を、単なる感情論や表面的・断片的な理解ではなく、理性的でかつ包括的・体系的な理解を得るため、理論・実証・歴史・思想の面から探求を試みる。